ISSN－0913－1906
関西大学博物館彙報
2024年３月31日 発行

阡陵

No. 88

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]

雲龍小釜・雲龍風炉

◉ 目　次 ◉

九州の松会における伝統儀礼の継承・・・・・・・・・・・・・・・・・・・森本　安紀　2
三瓶山周辺の６世紀末～７世紀の竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・鈴木　七奈　4
大阪府富田林・河内長野の火山岩産出地と嶽山龍泉寺西採集の石器・・・山口　卓也　6
特別展示「昭和のビーズバッグ－流行とデザイン－」開催報告・・・・・原田　喜子　10
古活字版『宗要柏原案立』の修正箇所について・・・・・・・・・・・・・岡本　梓　14

関西大学博物館
〒564-8680　大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
Tel. 06-6368-1171（直通）　Fax. 06-6388-9928
https://www.kansai-u.ac.jp/Museum/

九州の松会における伝統儀礼の継承

森　本　安　紀

九州各地で御田植え祭りが行われているが、なかでも福岡県田川郡添田町の英彦山を中心とした英彦山六峰とよばれる地域では、修験の要素が色濃く残った御田植え祭りがみられる。

これらの地域で行われていた古来の形式は、松の木を葛で編んだ高い柱を立てることと、田遊びの要素のある芸能を行うことだった。この柱を柱松とよぶことから、この儀礼を「松会」と称する。現在では、柱松を立てるのは福岡県京都郡神田町の等覚寺だけだが、これ以外の場所でも「松会」という名称だけが残っている。

本稿では大分県中津市耶馬渓町にある檜原山正平寺と福岡県築上郡上毛町にある松尾山三社神社の松会の調査をもとに、伝統儀礼の継承の在り方を検討したい。

「檜原マツ」が行われる正平寺は天台宗の寺院で、標高734mの檜原山の中腹に位置する。英彦山六峰のひとつとして修験道が盛んだった時には24坊あったと伝えられている。しかし、明治期の修験道の弾圧政策により、周囲の修験道の拠点である寺院が神社になっても、寺院として存続していたが、明治の初めには10坊あった坊も、現在の正平寺の座主家だけになった。このため、檜原マツの法要では大分県天台宗東教区の僧侶も参加し、御田植え式は地元の集落の人たちが檜原マツ保存会として、伝統の継承を担い、神輿の舁き手として近隣の高校の運動部の生徒が参加している。

かつては旧暦３月６日に中津の浜に行き海水を竹筒に汲む「潮汲み」という儀礼にはじまり、柱松を立てて、修法を行うなど数日をかけるものだったが、明治期に柱松は廃止されており、数日間続いた儀礼も４月第２日曜日に集約して行うというように簡略化された。

現在は、松会の１週間前に正平寺の住職が中津の浜の潮水を竹筒に汲み、毎朝山頂の権現様に供える。松会の当日、午前10時に住職たちは本堂前の神輿庫にある神輿３基の前で読経する（写真１）。その後「オクダリ」として、本堂前から少し下った仮宮（下宮）に行列が向かう。仮宮で法要を行い、本堂でも参加者の無病息災の行法が行われる。

午後１時半に、再び仮宮の前で法要を行い、法螺貝の合図で「オノボリ」の行列が出発し、本堂前まで戻ってくる。神輿庫に再び安置された神輿３基の前で午後２時すぎから御田植え式が始まる。御田植え式の構成は①水止め②田打ち③畦塗り④畦切り⑤代掻き⑥柄振り⑦種蒔きである。演者は白装束に編笠を深く被った御田人（農民）で、神輿の前で田仕事を模した所作をした後、周囲の観客の前を同じ所作でまわりながら賑やかに観客との掛け合いを楽しむ。田打ちで「ヤリマキ」を歌うのは正平寺の住職である。また、代掻きでは、牛の人形をもった御田人が登場するが、牛が途中で暴れだして観客に向かって突進する所作をする。観客が盛り上がる中、「孕み女」と称するお腹が大きくせり出した妊婦に変装した御田人が登場する（写真２）。孕み女は牛のハミ（飼料）の入った桶をかついで来るのだが、牛はハミをほしがり、孕み女を追い回す。牛の食事が終わったら孕み女は退場する。

檜原マツの渡御行列の中に、薙刀や鉞、「色衆盛一臈大札　常行坊」、「刀衆盛一臈大

写真１　神輿前での法要

写真２　代掻き

札　本蔵坊」と書かれた大きな２枚の木札がある。色衆や刀衆は、後述する松尾山の御田植祭りでは芸能を担当する組織名である。かつては次の担当者へ引き継ぐトウ渡しが行われていたようであるため、複数ある坊で松会を行っていたことがうかがえる。

檜原山から直線距離にして北へ約３km離れた松尾山三社神社の御田植え祭りは、４月19日直前の日曜日に行われる。ここでは田遊びの他に、獅子舞などを奉納するが、これは神輿庫修復の際に神輿の裏側の壁から薙刀と鉞が出てきたことから、これらも祭りに使用されていたのではないかとして、獅子舞は英彦山、薙刀は等覚寺から習い、2012年から祭りに加えた。

松尾山にはかつて、英彦山六峰の一つである医王寺があり、修験道が盛んだった時には36坊あったと伝えられている。檜原山の正平寺とは異なり、明治の神仏分離と、修験道の廃止に伴い、三社神社となったことで、松会は神社の氏子たちが継承した。その後、昭和20年頃に氏子が減少したことで祭りの存続が危ぶまれ、村の青年団が保存会として祭りを継承した。その後も祭りに参加していた村の小学校が閉校したため、氏子区域外で協力してくれる小学校を探し、保存会が伝統文化を伝え、教育の一環として小学生が踊りに参加するようになった。松尾山の御田植え祭りは、修験の場から氏子に、そして氏子区域外へと参加者の裾野を広げていくことで、継承されたのである。筆者が調査した日は、演者として祭りに参加する小学校の教諭を紹介するなど、氏子だけでなく、祭りの参加者に関係のある観客も楽しめるように演出されていた。

松尾山の松会の御輿は現在１基であるが、かつては３基あったという。午前12時前に本殿前から「オクダリ」として石段を降りた広場へ運ばれて、神事の後、お田植え祭りが始まる。演者は白装束の山伏姿の色衆と刀衆が中心となっている。こちらの祭りの構成は①水溜め②畦塗り③田打ち④代かき⑤籾蒔き⑥田草取り⑦刀行事と色衆楽である。田打ちと田草取りは白装束の男子と早乙女に扮した女子の小学生が演じる。代掻きでは、前足役と後ろ足役の２人の色衆が扮する「代掻き牛」が登場して（写真３）、観客にむかって突き進んだり、歩くのをいやがって、休息したりという姿に観客は歓声をあげる。籾蒔きでは孕み女が夫につれられて登場するが（写真４）、調査時の孕み女役は小学校の女性教諭だった。夫役がもつ藁苞から出した籾をまいて退場する。そして、刀衆による、獅子舞、薙刀舞、鉞舞が披露され、最後に楽打ちとして締太鼓２名とビンササラ４名による演舞（写真５）がある。刀衆の演舞は近年復活したものだが、ビンササラと太鼓の演舞は古来より伝わっており、近隣ではここでしか見られない。

写真４　籾蒔き

今回報告した２か所の地域では、修験道の要素や、刀衆・色衆という組織の名称、孕み女など、類似している点は多く、かつての英彦山六峰の共通性がうかがえる。そして、修験道の衰退とともに柱松は絶えたが、豊作を願う御田植え祭りは、徐々に地元の祭りとなっていった。地域の担い手が不足した時には、近隣の同じ宗派の協力や保存会の設立、小学校教育との融合というように、担い手不足という状況に何度も対応しながら、伝統儀礼を継承している姿がみられた。

調査・写真撮影日：2023年4月9日、4月16日
本研究はJSPS科研費JP19K01214の助成を受けたものです。

滋賀県立大学人間看護学部准教授

写真３　代掻き牛

写真５　色衆楽

三瓶山周辺の６世紀末～７世紀の竪穴建物跡

鈴　木　七　奈

１．はじめに

出雲国と石見国の境にある三瓶山の周辺地域および、神戸川流域とその支流域では、これまでの発掘調査で弥生時代～奈良時代の竪穴建物が多く見つかっている。その中でも、５世紀～７世紀の遺構・出土遺物から、６世紀末～７世紀前葉に、集落変遷・生活様式を共有する集団が、各集落に居住していたことが分かっている（島根埋文2023）。

本項では、過去の調査事例から、良好な状態で検出・調査報告された６世紀末～７世紀にかけての竪穴建物跡を紹介する。

２．三瓶山周辺の集落遺跡（図１）

三瓶山周辺の集落遺跡は、飯南町志津見地区・八神地区・角井地区・頓原地区・大田市三瓶地区に所在する。

これらの遺跡は、神戸川とその支流の河岸段丘上や丘陵の緩斜面上に位置し、弥生時代～奈良時代の竪穴建物跡等が検出された。

飯南町志津見地区には神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡・神原Ⅲ遺跡・板屋Ⅲ遺跡・門遺跡が所在する。各遺跡は神戸川によって形成された河岸段丘・丘陵の緩斜面上に位置する。神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡・神原Ⅲ遺跡では、古墳時代中期～奈良時代、板屋Ⅲ遺跡では弥生時代後期～奈良時代の竪穴建物跡が見つかっている。

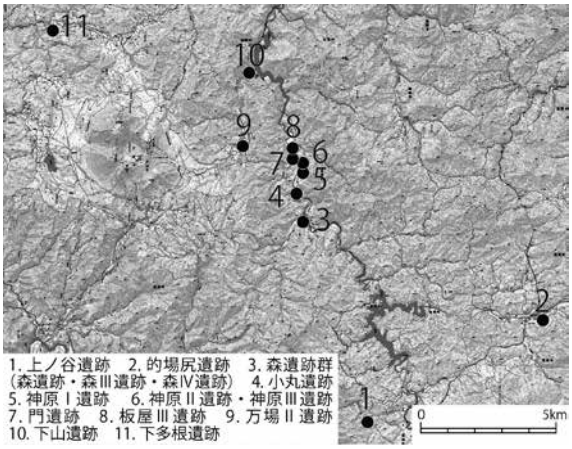

図１　三瓶山周辺の集落遺跡

同町八神地区の森遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡（以下、森遺跡群と記載。）・小丸遺跡は、神戸川の河岸段丘上に位置する。森遺跡群では弥生時代後期～奈良時代の竪穴建物跡が見つかっており、とりわけ古墳時代後期後半（６世紀末～７世紀初頭）の竪穴建物跡は他遺跡よりも多く検出された。

角井地区では万場Ⅱ遺跡・下山遺跡が所在する。万場Ⅱ遺跡は古墳時代終末期～奈良時代（７世紀～８世紀）の竪穴建物跡が多く見つかっており、周辺地域内ではやや後出する集落である。

頓原地区の的場尻遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代終末期の竪穴建物が見つかった。

大田市三瓶地区の下多根遺跡は三瓶山北側に位置し、三瓶川の河岸段丘上に位置し、古墳時代中期から奈良時代の竪穴建物跡が見つかっている。

３．６世紀末～７世紀の竪穴建物跡

当該地域の竪穴建物の規格・出土遺物の特徴

本地域の当該期に造られた竪穴建物は規格や立地には共通性があり、一辺が３～５ｍ程度の方形で造り付け竈を備え、地形に沿って並ぶように建てられることが多いことが特徴である。

竪穴建物跡から出土する土器は、６世紀中葉までは土師器のみだったのに対し、６世紀末以降には須恵器が全体で出土した土器の内、２割～３割程度確認されるようになる。土師器の器種比率は、５世紀までは甕・高坏・小型丸底壷が中心であったが、６世紀末以降は甕が圧倒的に多く、次いで甑・坏が出土する。須恵器の出土比率については、６世紀末～７世紀前葉は蓋坏が中心だが、７世紀中葉以降は蓋坏とほぼ同じ割合で高坏が出土するようになる。

これら６世紀末以降の出土土器の比率から、炊爨に使用する甕・甑などの道具は土師器を、供膳に使用する蓋坏・高坏は須恵器を使用している様相が見て取れる。

竪穴建物跡（６世紀末～７世紀）

SI10（森遺跡）

森遺跡群は、前述したとおり周辺地域の中でも拠点的な集落であった可能性がある。

SI10は本遺跡内でかなり良好な状態で検出された竪穴建物で、平面は4.5m×５mの方形、北壁に石組みに粘土を貼り付けた造り付けかまどを有する。床面では周溝と主柱穴、中央ピットが検出された。

遺物は建物内全面から大量に出土し、床面直上では須恵器蓋・土師器坏・土師器高坏の計13個が伏せられ、集積した状態で出土した。これらの遺物は籠などの有機物に入れられていたものが、入れ物の腐食によりこのような状態で出土したと考えられる。これらの遺物から、６世紀末～７世紀初頭の建物跡だと思われる。

SI44（森Ⅲ遺跡）

森遺跡群に含まれる森Ⅲ遺跡のSI44は、本遺跡の中でもやや高い位置に、同様の規格を持つ竪穴建物とともに、一列に並ぶように配置されている。本遺構の規格は4.3m×5.2mの方形で、南壁隅寄りに石組み粘土張りの造り付けかまどを有する。床面には主柱穴が２つと、中央の柱穴が１つ見つかった。

本遺構では、須恵器の坏身・高坏、土師器の甕・坏・甑・高坏が出土しており、前述した当該期における竪穴建物内の出土遺物の特徴をよく示している。出土遺物から、７世紀前半の建物跡だと思われる。

SI-28（万場Ⅱ遺跡）

万場Ⅱ遺跡は丘陵の緩斜面に位置し、７世紀代の竪穴建物跡が多く検出された。

SI28の平面の規格は５m×5.5mで、北壁中央に石組みの造り付けかまどを有する。床面からは主柱穴４つと壁帯溝を検出した。建物内からは遺物が多く出土しており、とりわけ炊爨で使用する甕が多く確認された。また、鋸歯紋が施された土製の紡錘車などが出土しており、類似する石製紡錘車が平野部でも出土することから、鋸歯紋紡錘車を使用した祭祀を行う集団が当該期にまとまって移住してきた可能性が指摘されている（池淵2019）。

４．おわりに

本稿では三瓶山周辺の遺跡と遺構の紹介をするに留まったが、今後はこれらの資料から中国地方山間部の竪穴建物を中心とする遺跡資料をさらに収集し、集落の変遷や平野部との関係性を明らかにしていきたいと考えている。

主要参考文献

池淵俊一2019「出雲平野における6・7世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター2023『猪子原遺跡　上ノ谷遺跡　高城跡　小原遺跡』島根県教育委員会

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

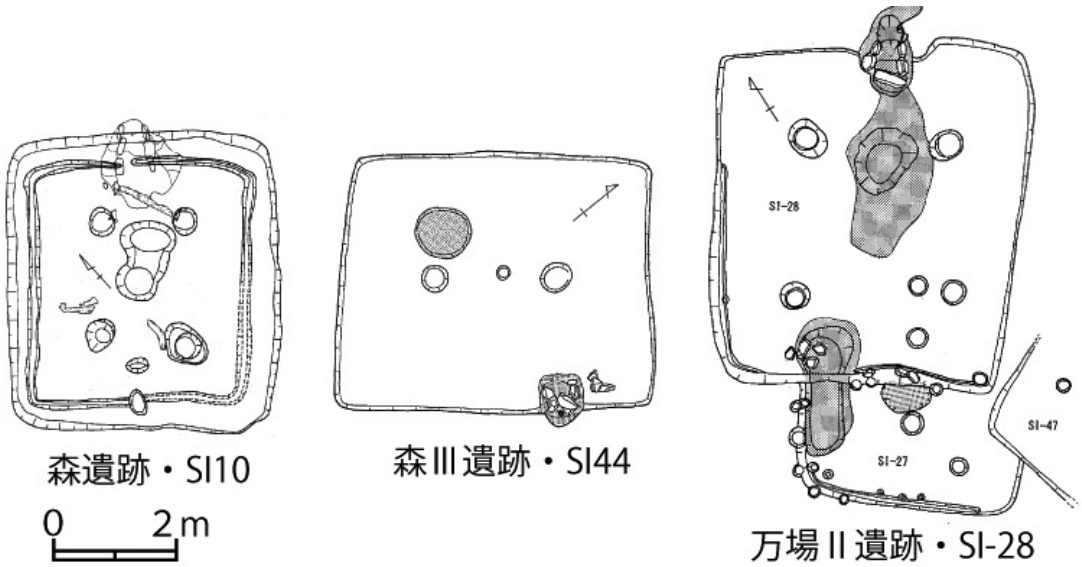

図２　主要な竪穴建物跡（森遺跡・森Ⅲ遺跡・万場Ⅱ遺跡）

大阪府富田林・河内長野の火山岩産出地と嶽山龍泉寺西採集の石器

山　口　卓　也

1. はじめに

近畿地方中央部の後期旧石器は、二上山北麓に産出する火山岩類の一つ、サヌカイト（瀬戸内火山岩類ガラス質安山岩）を主要な石材としている。一方、近畿地方中央部から和歌山県北部には、二上山以外の第三紀瀬戸内火山岩類の小規模産出（沢井・佐藤1989）もあり、考古学的な研究対象として、どのような石材が産出して、また本当に石器になっていないのかについて、十分な踏査検証が行われていない。

筆者は、佐藤隆春の紹介した火山岩産出地（佐藤1985）のなかで、現状確認が困難な岩脈などを除いて溶岩や岩床、岩頸など記載されているものをできるだけ踏査したいと考えた。意図は、後期旧石器時代に、二上山北麓以外の石材が使われているか、二上山以外の石材が使われるとすれば、どのような石器群なのかを解明することにある。

さらには、石材開発の違いから、前期中期旧石器時代遺跡が近畿地方中央部に発見できる可能性を知るためである。

今回は、大阪府富田林市・河内長野市周辺の踏査（図１）を行い、石器となる可能性のある石材の産出を確認したので、これを紹介したい。

2. 富田林市嶽山と汐ノ宮の火山岩

富田林市と河内長野市境周辺の小規模火山岩産出地を踏査した（図２）。

嶽山火山岩は角閃石輝石安山岩の溶岩で、花崗岩基盤上の甘南備累層（二上層群原川累層相当花崗岩礫を含む礫岩層）を覆っている。嶽山火山岩は、本来暗灰色の塊状または板状節理の緻密だが風化して灰褐色～白色となっているとされる。踏査では、嶽山山頂周辺及び北尾根（図１-A）で同様の火山岩が分布していることを認めた。龍泉寺の東斜面では、花崗岩円礫と共に暗灰色の流理が縞状に現れた安山岩（サヌキトイド相当）や角閃石斑晶の目立つ黒色安山岩など新鮮な火山岩転石が存在している。二上山北麓春日山産出ガラス質安山岩（サヌカイト）に類する緻密な石材は発見していない。

嶽山西方の河内長野市境となっている石川川底（図１-B）に露出する汐ノ宮火山岩（写真２）は顕著に柱状節理が発達し、大阪府レッドリスト地形地質版ランクCに指定されている。この火山岩は、かんらん石輝石安山岩の溶岩で、甘南備累層のザクロ石黒雲母流紋岩や無斑晶安山岩の角礫を含む礫岩層を覆っている。踏査では、汐ノ宮火山岩の柱状節理部分は、石基がガラス質ではあるが微斑晶が大きく節理も強く、石器

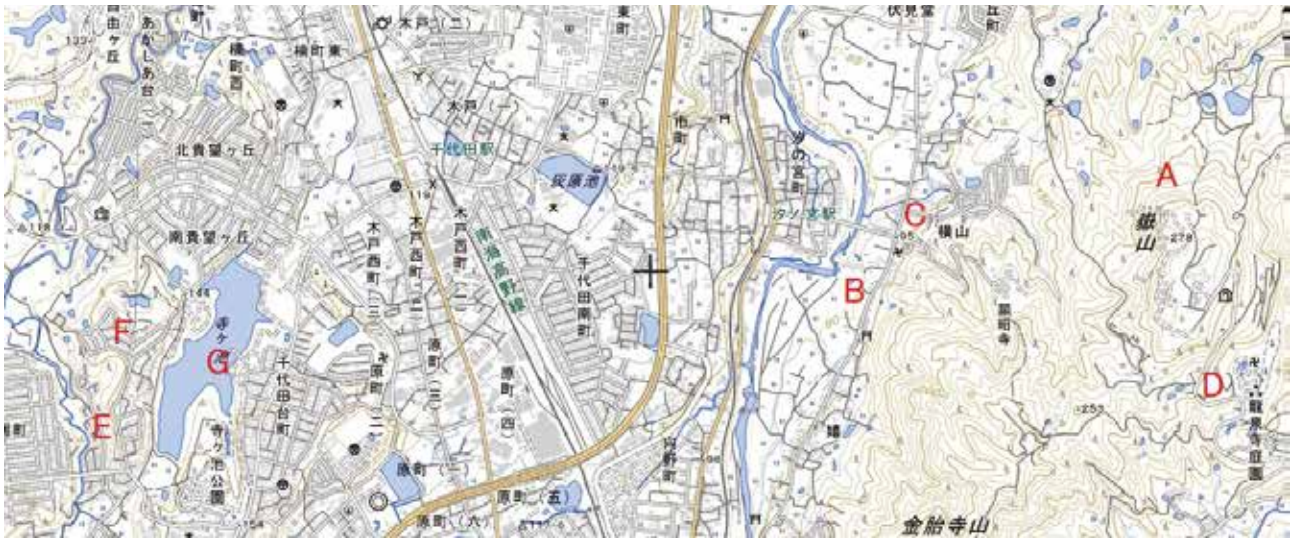

図１　周辺地形図

石材には不向きであろうと思われた。一方、汐ノ宮火山岩に覆われた甘南備累層に貫入した黒色無斑晶安山岩があって、これが一部ガラス質であることを認めた。類似の黒色無斑晶安山岩や暗灰色の流理が縞状に現れた安山岩（サヌキトイド）も、汐ノ宮石川東岸から横山方向、嶽山から伸びる山裾切通しや住宅の石垣などに積まれ（図１-C）、場所によっては露地露頭（写真３）している。

踏査の所見では、嶽山から汐ノ宮にかけて従来知られる嶽山火山岩・汐ノ宮火山岩と異なる無斑晶（ガラス質）安山岩礫が含まれていると推測された。今後、石器石材になりえる火山岩を探るとき、嶽山火山岩や汐ノ宮火山岩とともに、その周辺の層群の露頭も注目したい。その他、佐藤によれば、南の金胎寺山周辺には、火山岩脈が複数貫入しているとされるが、未踏査である。

3. 富田林市嶽山龍泉寺西採集の石器

踏査中に、嶽山の東斜面、龍泉寺境内からすこし西の緩傾斜（図１-D）で若干の石器類を採集した（写真４）。

台形様石器（図３-１）は、表面が白い風化面で覆われた緻密な黒色ガラス質安山岩（サヌカイト）製である。瀬戸内系横長剥片素材ナイフ形石器の背部加工とは異なり、幅広の剥片を縦に半折しており、折断加工の一部がヒンジとなっている。風化面が「粉っぽい」特徴がある。単独の採集である。

灰色の流理構造が流紋を縞状に観察できる安山岩（サヌキトイド）製の石器のうち図を示した１点（図３-２）は、一側縁に削器作業部を作出するが、３面は折断または折損し、本来の器形は不明である。あるいは流理構造で阻害されて伸展せず破断したものか。写真の残り４点も、石核または大形剥片に加工を施したものが破断したものと思われ、顕著な流理構造のある同種石材に組織的な石器生産に限界があったことを示している。このような石材は、嶽山・横山から汐ノ宮周辺で転石として広く認められ、また二上山北麓の春日山で「サヌカイト」と同時に産出するサヌキトイド石材に類似する。

嶽山龍泉寺西の石器類には、嶽山山頂にある板状節理の発達し、風化の進んだ角閃石輝石安山岩は使用されていない。

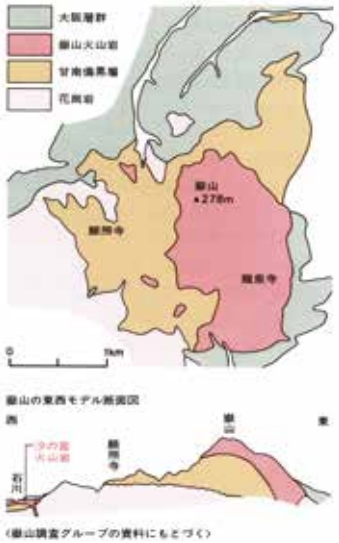

図２　嶽山周辺地質図　（沢井・佐藤 1989）

写真１　嶽山遠景（西から）

写真２　汐ノ宮火山岩露頭

写真３　黒色無斑晶安山岩（横山）

写真４　嶽山龍泉寺西採集の石器類

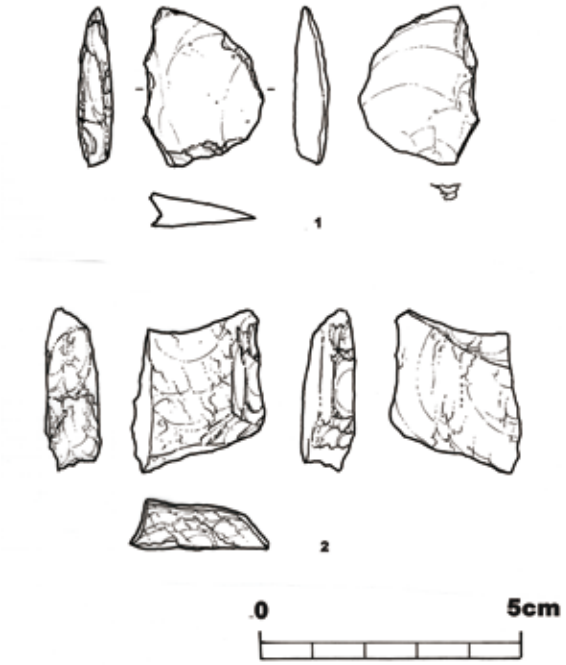

図３　嶽山龍泉寺西採集の石器類

4. 河内長野市寺ヶ池周辺の火山岩

河内長野市の寺ヶ池火山岩（巽他1981）は、天野川支流の小山田町丘陵西崖に露頭する（図1-E)、板状節理が発達した橄欖石古銅輝石安山岩である。「暗黒色緻密な岩石」「ガラス基流晶質」（佐藤隆春1985）とされていることに注目し、佐藤とともに周辺踏査を続けている。

周辺は、六甲変動後半期、南北方向に隆起した丘陵で、寺ヶ池（図1-G）は、丘陵間をせき止めて形成されていて、池の東西両岸には固い大阪層群下部が露出している。

池の水面は平時標高135m程、東側は標高150m程の住宅地、西側は、寺池台住宅地のある丘陵となり、標高160mが最高部となる。

踏査の結果、東岸の大阪層群造成土から縞状流理の強いサヌキトイドに類した古銅輝石安山岩礫を僅かに採集した。河内長野市の文化財包蔵地地図では、東岸にサヌカイト製縄文時代石器類が散布するとされ、市立ふるさと歴史学習館が収蔵するものは、二上山北麓産出と思われるサヌカイト相当黒色ガラス質安山岩製石鏃、削器などである。

西岸南半では、一定の範囲に限って、橄欖石古銅輝石安山岩やサヌキトイド相当のもの、発泡溶岩など、さまざまな安山岩の礫や破片の散布を認めた。多くに基盤花崗岩由来の捕獲鉱物が含まれている。

西岸で採集した岩相の異なる安山岩片には、加工が施された石器と考えられるものが僅かではあるが存在している。かなり慎重な表面踏査を行ったが、サヌカイト相当石材の石器類は発見していない。今後、山口と佐藤が連携して、それらが人工品であるかどうか、所属時期、埋蔵環境などについて検討を行いたい。

寺池台住宅地（図1-F）は、1970年代に堺の日本製鉄関係者のために開発された住宅地であるが、もとは果樹園であった。開発時、標高160mあたりの高所を掘削したところ、「固い板石」が露頭し、均して宅地にするのが難工事となったこと、その板石を崩して住宅地の石垣にしたとの情報がある。現地を確かめると、住宅地にサヌキトイド相当の安山岩で積まれた石垣があり、僅かではあるが二上山北麓春日山産出サヌカイトに似た黒色ガラス質安山岩が含まれている（写真５・６）。また、寺池台緑地の造成土中には、大量の橄欖石古銅輝石安山岩礫や板石が含まれていて、一部に石器石材選別のための「試し割り」剥離痕を残すものがある。

寺池台の北方、南希望ヶ丘住宅地標高145mの宅地造成地面で、大阪層群整地面からサヌカイト相当の黒色ガラス質安山岩の大礫を数点採集した（写真７・８）。寺池台の高所から北方向には傾斜があって、同種石材が周辺に流下している可能性がある。

なお、踏査をともにした佐藤から、寺ヶ池火山岩は発見時に橄欖石輝石安山岩として記載されていること、いわゆるサヌカイトと異なる火山岩であるので、産出については溶岩露頭で確かめる必要があり、周辺を精密に調査しないといけないとの教示をいただいている。寺ヶ池火

山岩産出状況と岩石学火山学の新知見については、佐藤から別途報告される。

5. 近畿地方中央部の非サヌカイト小規模ガラス質火山岩産出地をめぐって

二上山北麓の黒色ガラス質安山岩（サヌカイト）は、近畿地方の石器生産おける支配的石材であり、後期旧石器時代ナイフ形石器文化段階には、瀬戸内系横長剥片剥離伝統による石器生産の異所展開が構造化して顕在化することで、その分石器文化と分布域が一体となって構造化した。その圧倒的な質量は、近畿地方中央部をすべて覆ったように思われてきた。

しかし、西宮市甲山山頂遺跡（山口2023）で台形様石器群が甲山黒色ガラス質安山岩を石材としているように、今回踏査報告をした嶽山や汐ノ宮、寺ヶ池など小規模石材産出地に産した石材でも、特定の段階や状況下で利用される可能性があるのではないかと考える。小規模石材産出地を開発した石器群は、原石産出地への回帰でその起点を共有しないので、二上山を核として成り立つ後期旧石器時代瀬戸内系旧石器と差異があるかどうかを確かめる必要がある。目視観察での石材判定は困難であるが、すべて二上山産出と決めつけるのは危険であると考える。

近畿地方の旧石器を、非サヌカイトの小規模ガラス質火山岩まで広く探索を続けるなら、そこで見出される石器群は、ひょっとすると技術系統軸・時間軸を異にすることも考えられる。前期中期旧石器時代の石器群は、火山岩原石産地の遡上開発を達成せず、構造化した石材供給を組み込んだ遊動領域を持たないのであれば、非サヌカイト火山岩の石器群は前期中期旧石器時代遺跡探索の手がかりとなるかもしれない。

写真８　大阪層群中の黒色ガラス質安山岩

写真５・６　石垣の黒色ガラス質安山岩

写真７　大阪層群中の黒色ガラス質安山岩礫

これからも、近畿地方小規模ガラス質火山岩の産地の踏査と記載を続けていきたい。寺ヶ池東岸採集石器の観察をさせていただいた河内長野市立ふるさと歴史学習館に感謝いたします。

引用・参考文献

河内長野市文化財包蔵地：
https://webgis.alandis.jp/kawachinagano27/webgis/index.php/autologin_jswebgis?u=guest_bunkazai&ap=jsWebGIS&m=2&li=1

佐藤隆春　1985「大阪周辺から和歌山市東方の新第三紀火山岩類」『瀬戸内区の特性』

沢井誠・佐藤隆春　1989「瀬戸内火山岩区―設楽と二上山を中心に―」『アーバンクボタ』第28号

巽好幸・石坂恭一　1981「Existence of andesitic primary maguma；An example from Sowthwest Japan」『Earth Planet.Sci.Lett.,』53

山口卓也　2023「西宮市甲山の黒色ガラス質安山岩と甲山山頂遺跡の旧石器」『ひょうご考古』第19号

関西大学非常勤講師

特別展示「昭和のビーズバッグ－流行とデザイン－」開催報告

原　田　喜　子

はじめに

令和５年（2023）11月12日（日）から17日（金）まで、関西大学博物館にて特別展示「昭和のビーズバッグ－流行とデザイン－」を開催した。博物館実習展とミニテーマ展「復元 日本中世の天台談議所―成菩提院聖教から―」との同時開催であった。

ビーズバッグとは、ビーズ刺繍によって表面を装飾したハンドバッグのことである。日本では高度経済成長期の昭和34～35年（1959～1960）に流行の最盛期を迎えたとされ、芸術鑑賞会や食事会、成人式など、主に女性の特別な日の装いに華を添える存在であった。

本展示では、昭和30～50年代に日本国内で製造されたと思われるビーズバッグ50点を、４つのデザインに分けて展示した。ビーズ刺繍による模様は、ビーズの並べ方、色や形の異なるビーズの組み合わせ、ビーズを盛り上げるなど、多様な技法を使って表現される。黒色の布地に黒色のビーズを刺繍することはさらに高い技術を必要とし、製袋にも高い技術が使われている。また、フラップや留め具のデザインも見どころの一つであり、ビーズバッグに詰まった多彩な技術を展覧することを狙いとした。

1．洋風デザイン

１つ目のデザインは、洋風デザインである。高度経済成長期において、市民の間で音楽会や食事会などが催されるようになり、洋装でドレスアップした女性はアクセサリーを兼ねて小型

展示風景

洋風デザインの展示（部分）。色別、形別など、デザインの特徴が分かりやすいように配慮して並べた。

のハンドバッグを身に着けた。ビーズバッグは、20cm四方に収まるほどのサイズで、色はシルバー調に仕立てられたものが最も多く、他の色では、ホワイト調、ブラック調、ゴールド調が多く見られる。

昭和34年（1959）に発行された雑誌『婦人画報』（1959年10月）のコラム「おしやれなアクセサリーズ」で、ファッションデザイナーの森英恵（1926-2022）は「音楽会や、パーティやフォーマルな外出のときには、中に入れるものを、ハンカチとルージュとコンパクトと小さいドル入れくらいに整理して、小型のクラッチバッグにするといい。」と記している。このようなマナーが理由となって、ビーズバッグは小さなものが多いと考えられる。内側に小さなポケットとそのポケットにちょうど入るぐらいの小さな鏡が付属している例が多数あり、バッグと同柄でコインケースを伴う例も展示した。

2. 和風デザイン

２つ目は和風デザインである。女性の洋装が普段着として定着するなか、和装は特別な日のおしゃれ着として需要が高まっていった。ハンドバッグは洋装のためのものであったが、和装にも合うデザインが考案されるようになる。

ビーズバッグも和装向けの柄がデザインされ、バッグと同じ柄を施したビーズの草履がセットで販売されることもあった。使用される模様や色は着物の流行と関係する傾向がみられ、その例を踏まえて展示した。和風デザインのビーズバッグは、模様を片側に大きく施し、もう片側は小さく模様を施したものが多い。これは、着物の帯の「お太鼓柄」に共通した柄付けが見いだせる。「お太鼓柄」では、結んだ時に背中側になる幅広く見える部分に大きく模様を施し、お腹側の狭い部分に小さく模様を施すのである。

前出の『婦人画報』に掲載された森英恵のコラムにおいて、「手のついた型でも、こわきにかかえるような持ち方にしてマダムらしい落つきを出す。若い人ならブラブラさげても元気そうに見える」とある。このことから、持ち手がついているものは主に若年者向けで、持ち手のな

色とりどりのビーズで花を描き、周りの地の部分を白いビーズで埋めるデザインは数多く見られる。左の展示品は、花弁部分のビーズを盛り上げて立体的な工夫が施された作例。ハンドバッグと草履のセットで昭和 43 年頃に高島屋で販売されていた。

和風デザインの展示（部分）。バッグの反対側のデザインを写真で展示した。

いものは年長者向けであることがわかる。バッグによっては持ち手をバッグの中に収納できるタイプがあり、若い頃から年長まで長く使える工夫であったと考えられる。

3. 抽象的デザイン

３つ目は、抽象的デザインである。個性を表現する服装が求められるようになると、新たなデザインが生み出されていった。ビーズバッグでは、抽象的な絵柄が見られ、デザインの多様性とともに洋装にも和装にも合わせられるような汎用性が求められたのではないかと考える。また、抽象的なデザインのものはバッグのサイズが大きいものが見られ、より日常の使用に適した仕様がうかがえる。

一見では何が描かれているのかわかりにくい模様でも、反対側の模様から、鳥が群れを成して飛んでいる様子が抽象化されているとわかる作例がある。その模様は、俵屋宗達（活躍期1602-1635）が描いた《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》を連想させられ、古典柄を変革することで、当時の新しさを感じさせながらも、親しみやすさを狙ったデザインであると捉えられる。他にも、同色のビーズで大きな幾何学模様を描いた作例、複雑に交差する線による模様が、反対側の模様を見ると、木立の風景を描いているように見える作例、孔雀が羽を広げた様子を模様化したような作例などを展示した。慣例的な模様から脱した多彩なデザイン例を選んで展示した。

4. はしもとのデザイン

そして、４つ目は、株式会社はしもとのデザインを紹介した。はしもとは、大阪でビーズバッグを製造した会社である。明治から平成までの長い歴史を持つといわれるが、現在は廃業しており、詳細は分かりかねる。フランス式のリュネビルという方法でビーズ刺繍を行ったと聞く。製品は東京でも販売され、皇族が使用したという情報もある。刺繍されたビーズの並びが極めて整然としており、残された製品から技術の高さを知ることができる。ここでは、よりフォーマルな作例を展示した。

抽象的デザインの展示（部分）。前面の複雑な模様も、反対側に描かれた部分的な模様により、何が描かれているのか判明する場合がある。

楕円形の枠の中に紫色の花を描いた作例を展示した。窓のような枠の中に花や風景を描くデザインは、中国の陶磁器に見られ、西洋ではフランスのセーブルが得意としたものである。はしもとのデザイナーは陶磁器のような工芸品からもデザインの着想を得ていたようである。ファッションデザイナーという職業が注目されるようになってきた時代において、ビーズバッグのデザイナーがどのように活動していたのかは、今後研究していきたい課題の一つである。

また、はしもとのバッグに添えられた手鏡と栞の一例も展示した。展示した栞は、片面にフォーマルバッグに関するマナーが記され、もう片面にはバッグのお手入れ方法が素材別に記されている例で、手鏡と栞にはいくつかのバリエーションが存在する。

おわりに

昭和の女性にとって、きらびやかなビーズバッグを所蔵することは憧れであり、多くの女性が買い求め、大切に扱っていたと、展示品の所蔵者や来館者から聞くことができた。

その価格の一例は、昭和39年（1964）に『婦人画報』に掲載されたものが8,600円であった。同年の公務員上級乙（大卒程度）の月給が18,100円であったことから、ビーズバッグが高額であることが分かる。

ビーズバッグを専門に製造する会社は、最盛期では国内に10社ほどあったといわれているが、時代の変化とともに減少し、その数は現在２社だけとなってしまった。そんな中でも高度な製造技術が受け継がれ、海外からも注文が集まり、次世代の職人の育成が取り組まれている。

学術的にはほとんど研究されていないビーズバッグであるが、そこに込められた歴史と技術は日本の高度なものづくり文化を伝えるうえで重要な存在である。今後は製造工程や流通経路なども研究し、日本にある高度な技術とその成果を伝えていきたい。

関西大学博物館　学芸員

赤色、青色、黒色のビーズは、切り込みの側面を金色に着彩した手の込んだものを使用している。

古活字版『宗要柏原案立』の修正箇所について

岡　本　　梓

2023年11月12日（日）から17日（金）にかけて、関西大学博物館でミニテーマ展「復元日本中世の天台談義所―成菩提院聖教から―」を開催した。同展示では、日本中世に出現した「談義所」と呼ばれる学問寺院での学びに注目し、「柏原談義所」として著名な寂照山円乗寺成菩提院（滋賀県米原市柏原）に伝存する聖教と、近年、関西大学図書館が所蔵するに至った成菩提院旧蔵聖教とを出陳した。

本稿では、展示で取り上げた中から関西大学図書館が所蔵する『宗要柏原案立』（5冊）を紹介する。

図１『宗要柏原案立』佛部内題 関西大学図書館所蔵

『宗要柏原案立』は、成菩提院を柏原談義所として整えた中興開山・貞舜法印（1349-1422）が撰述したと伝えられる天台論義書であるが、現在のところ、貞舜の自筆本や貞舜が活動した時期の同題写本は見つかっていない。

関西大学図書館が所蔵する『宗要柏原案立』は、寛永９年（1632）に刊行された古活字版である。本来は佛部・五時部・教相部・菩薩部・二乗部・雑部の６部から構成されるが、関大所蔵本は教相部を欠いている。

５冊ともに四つ目綴じの袋綴装で、法量は縦26.1×横19.0cmほど。表紙には柿渋が塗られており、外題はない。いずれかの補修の段階で表紙・裏表紙の反古紙が抜かれている。本文は漢字・片仮名。返り点・送り仮名は活字を以て印刷されているが、一部、後から書き加えられたものも確認できる。界線あるいは匡郭はない。本文は丁の表と裏とに11行ずつ、１行あたり20～21字ほどで印字される。

佛部の本文末には「寛永九壬申年應鐘上旬／於延暦寺止観院佛母谷刊摺之訖」、五時部の本文末には「寛永九壬申年應鐘中旬／於延暦寺止観院佛母谷刊摺之訖」とあり、本書が延暦寺東塔止観院北谷で寛永９年（1632）の上旬から漸次刊行されたものであると判断できる。

図２『宗要柏原案立』佛部刊記 関西大学図書館所蔵

『宗要柏原案立』本文には文字を修正した痕跡が複数箇所に認められる。一度印刷した文字を消し、上から新たに活字を捺した痕跡である。

図３・４
『宗要柏原案立』佛部 16 丁 関西大学図書館所蔵
『宗要柏原案立』二乗部 14 丁 関西大学図書館所蔵

従来の古活字版の書誌情報調査では、誤字修正の方法として「胡粉修正」、すなわち誤字に

胡粉を塗り、上から別の文字を記すという方法が報告されている。関大所蔵本も同様の手法を以て修正されたものと考えられる。

以下に、関大所蔵本の各編に見られる修正箇所を示す。なお、修正前の文字を判別できるものについては、括弧内に修正前の文字を記す。

佛部	16丁表 1行目	言（無）
五時部	17丁表 7行目	異（意）
	19丁裏11行目	仍
	49丁裏 7行目	ミナ
二乗部	3丁裏10行目	難（趣）
	14丁表 8行目	乗（心）
	16丁表 5行目	鬘（髪）
	16丁裏 4行目	鬘（髪）
	17丁表 2行目	鬘（髪）
	18丁裏 1行目	鬘（髪）
	18丁裏 2行目	鬘（髪）
	18丁裏 4行目	鬘（髪）
	20丁表 9行目	鬘（髪）
	20丁表11行目	鬘（髪）
	28丁裏 5行目	果
雑部	15丁表11行目	是（有）
	16丁裏 5行目	几（ノ）

このうち、二乗部の16丁から20丁に連続する「鬘」は、髪冠を残して「曼」のみ修正されている。これは、「鬘」の活字が不足した際に「髪」の活字で代用し、印刷後に下部の「友」を「曼」に改めたのだろう。

また更に、漢字一字を修正するのとは別に、修正箇所を切り抜き、活字を組んだ短冊状の料紙を裏側から貼りつける方法も確認できる（雑部16丁表１～９字目）。

文字修正の痕跡から、『宗要柏原案立』の出版に際して、本文の校正作業が施されていたと推考する。同書を誤りのない厳密なテクストとして出版しようとする出版者の意図を窺うことができるわけである。

古活字版『宗要柏原案立』が出版された頃、天台宗では、相重なる戦乱や比叡山焼き討ちによって失われた教学の復興が目指されていた。元和以降には徳川家康（1542-1616）の後援を受けた南光坊天海（生年未詳-1643）によって、各地の寺院に伝存する聖教の蒐集・出版が進められている。

古活字版『宗要柏原案立』の出版時期と、当時行われた天台宗復興事業の実施状況とを鑑みれば、『宗要柏原案立』もまた、当時の天台僧侶たちが学ぶべきテクスト、教科書のようなものとして蒐集・出版されたと考えられる。

寛永９年（1632）の古活字版『宗要柏原案立』の出版から13年後の正保２年（1645）には、整版本『宗要柏原案立』が出版される。

整版本の本文は11行20字詰めで、古活字版の本文と比較すると、各論題に番号が振られているほか、行頭に印刷されていた返り点や送り仮名が行末に収まるよう、改行箇所が変更されているといった変化を確認できる。また、古活字版で修正されていた箇所はすべて修正後の文字を採用している。こうした相違から、整版本の版面は古活字版を覆刻したものではなく、より読みやすくなるように整理を加えた上で新たに作成したものであると分かる。古活字版の出版を経て、整版本が出版されたのだろう。

古活字版『宗要柏原案立』については、現在のところ、同じ活字を使用した古活字版や、同じ止観院佛母谷から出版された刊本が確認されていない。古活字版に使用された木製活字は大量に現存しており、今後、調査する必要がある。あわせて、『宗要柏原案立』の成立、さらには出版に至る背景についても、考察を進めたい。

参考文献

成菩提院史料研究会 編『天台談義所　成菩提院の歴史』法蔵館, 2018.

高木浩明『中近世移行期の文化と古活字版』勉誠出版, 2020.

川瀬一馬『古活字版之研究』（上・中・下巻）増補版, 日本古書籍商協会, 1967.

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ（https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp 最終閲覧日：2024/1/24）『宗要柏原案立』6巻（請求記号：藏/眞/327）

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『延暦寺木活字関係資料調査報告書』（本編・図版編）滋賀県教育委員会, 2000.

関西大学博物館　学芸アシスタント
関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程　在学

◘ 博物館だより

◇2023 年度イケフェスに参加

大阪市の「生きた建築ミュージアム フェスティバル大阪（イケフェス大阪）」に協力して 10 月 19 日にキャンパスツアーを実施しました。30 名の参加があり、環境都市工学部の橋寺知子准教授に関西大学一高・一中エリアにある村野藤吾が設計した建物をご案内いただきました。

◇「博物館実習展」を 11 月 12 日から 17 日まで開催しました。この展示会は、企画から展示まで学生自らが主体的に取り組みます。今年度は 48 名の実習生が「十二支の変遷」「装丁維新 - 綴じ方の歴史 -」「江戸髪結文化～髪と歴史をほどく～」「お～盛んやね、大阪！大大阪展」「新旧万博から見る大阪史」の 5 班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。また、ミニテーマ展「復元 日本中世の天台談義所―成菩提院聖教から―」と特別展示「昭和のビーズバッグ－流行とデザイン－」を同時開催し、会期中に 632 名の方にご覧いただきました。

◇関西大学博物館冬季展を 1 月 15 日から 2 月 29 日まで開催しました。

「関西大学博物館資料の旧蔵者たち－好古から考古学へ－」では、18 世紀に始まる本草学の第一人者である小野蘭山が収集した「小野蘭山愛蔵石類」を武田科学振興財団杏雨書屋から借用し、はじめて外部で展示する機会となりました。

「本山コレクションにみる縄文時代の貝塚」では、当館が所蔵する登録有形文化財「本山コレクション」の貝塚出土資料の中から主要なものを展示し、2023 年まで 4 ヵ年にわたる「本山コレクション貝塚研究班」の整理･調査･研究の成果を報告しました。

「関西大学博物館新収蔵資料展」では、2022 年度に寄贈いただきました「本山幸彦氏旧蔵本山彦一関係資料」と「近世近代貨幣コレクション」の 2 件のコレクションを紹介しました。

会期中には 754 名の方にご覧いただきました。

2024 年は、関西大学博物館が 1994 年に開設されてから 30 年、末永雅雄が 1954 年に考古学資料室を設けてから 70 年となります。2024 年度春季企画展では､創設 100 周年を迎える文学部と連携して連携企画展「花開く大阪の文化」（会期：４月７日（日）～５月 31 日（金））を開催します。ご期待ください。

・・・編集後記・・・

表紙の「雲龍小釜・雲龍風炉」は、校友で釜師の角谷與斉氏が当館のために制作し寄贈くださったものです。角谷氏は 1990 年に関西大学工学部を卒業し、茶道・裏千家の出入方職人となられました。

雲龍小釜・雲龍風炉は、裏千家十五代鵬雲斎大宗匠のお好みで、武野紹鷗が所持していた水差しの雲龍文を千利休が釜に写したと言われる雲龍釜のデザインに倣っています。雲龍文は、龍が雲の間を昇る様がめでたいとされる吉祥文様です。雲龍釜を乗せるための雲龍風炉は土製の風炉の形を写した金属製の風炉です。

関西大学博物館彙報　No. 88　2024年３月31日 発行

関西大学博物館　　編集